

「あ、もうあと三十分でまた乗遅れるぞ。已も今日は遊んで居る金は少いし、いゝ加減で見切りをつけてまた停車場へ歸らなければなるまい……」かう言つたが、チラと顔を掠めた女の腫が眼に入ると、また思切悪く紙巻に火を點けて、「だが、いくら旅の者だからって、お前さんもうこの位ジラしたら本音を吹いてもよさうへきのぢやないか！」

女は黙つて薄笑をしたが、その儘手許に引寄せた盃をグイ／＼と干した。せゝら笑つて居るやうな、鈍いボヤけた腫の奥に、やがて冷たい肯定が浮んだ。女の顔を追つて居た男の眼が透さずその腫の意味を讀んだ。「こゝいらぢやどう……？」言葉尻を唾と一しよに吞込んで、男はだしぬけに五本の指を屈け、握拳を見せ笑つた、「こゝらが相場だぜ。」

それでも女は氣乗のしない薄ら笑をつづけ、やゝそり身加減になつて煙草をふかして居る。

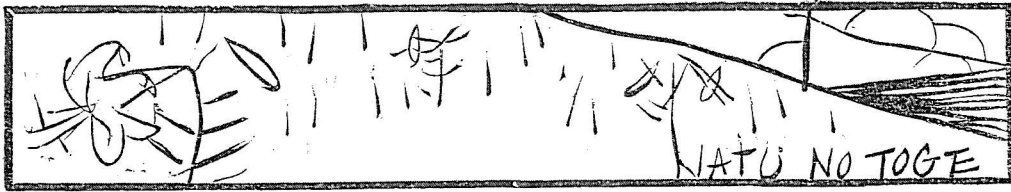
男が更に指を二本ふやすと、女は急に引締つた眞面目な顔附になつて、

「前勘にね、」かう言つたが、男の側にある風呂敷包が眼に入ると、スツと腕を延して、それをまづ自分の膝近くに引寄せてしまつた。そして下坐敷の氣勢にジツと耳を敬てた。

乞食

水野 仙子

源吉と由に清吾、丁度三つ違ひ位に出来た好い按排な揃つた兄弟で、しかも三人とも乞食である。もとから乞食の種で乞食の腹に乞食と生れたのではない。明治三十八年の不作は——新聞では其頃東北の饑饉と云つた——立派な、傷のない三人の男の子を乞食にしたのである。饑饉といつても商家で形造つた一つの町といふものゝ上から見渡したところでは、さして別段な變りも認められない。たゞ内證にはいつて見ると、それ何處でも一般に御飯には糧が交つた。學校へ行く子供達がお晝のお握飯に麥が交つても、自分一人ぢやないから格別恥かしいとは思はない。却つて眞白く綺麗なものを極り悪るがつた。南京米は馬鹿に色が白くて粒が大きいからである。殖えるのに堪へられなくなつて、家内の多い家ではこつそり此南京米を混ぜて使つたものだが、内證の方針は意外な方面に反響を呈して、菓子屋は饑饉年が豊年だといふことを或人が發見して



言つた。或る程さう聞いて見ればこれはさうかも知れない。手當が幾分か落ちて居るから、一寸あの大福が喰べたいな位の腹も空くだらう。今川焼の一錢二錢をどうかする位の働さは何家の小僧にだつて出来る。古いのは古いので賄の不平を一寸自轉車を横付けにして、カステラか羊羹かの少し大きいこともやり兼ねない。袋や竹の皮は倉の中の仕事で、ひつくるめて隣家の庭にぽんとやればなんの事はない。そこで菓子屋が繁昌は事實として置いて、乞食の殖えたのも争はれない現象だ。そろ／＼穴のあいた錢が拂底の折から、さう／＼五厘玉を氣前よく投げてやる譯にも行かず、出ないよと脹れて見せても當節の乞食はなか／＼物堅い。終には小僧と乞食の意地くらべが始まるやら、かと思ふと黒い眼鏡をかけて兵兒帶を廣く巻きつけた女などが、月琴を掻き鳴らして尺八の男と兩側を手分けして廻つて来る。

源吉と由と清吾の三人は、其中に甚だしく異色があつた。何處から來たともわからないが、其言葉で見ると此町の在方らしい。町のうちの者ならまさか男の子をむざ／＼と乞食にしなくとも、子僧になり何になり使ひ道もあるのだが、何處からか流れて來たものゝ子がつまらない田舎に取り残されたのであらう。村に生えぬきの者なら、いくら饑饉だともやはり乞食にはすまい。と思ふのは併し町の者の目から見たことで、其頃常舞臺を借りて催された義捐救済の幻燈で見た實況には、藁の餅を搗いて食べたといふ話もあつた位だから、三人の子供が町を指して出て來たのも怪しむに足らなかつたかも知れない。

何しろ三人がぞろ／＼と揃つて門に立つのが著しく人の目を引いた。外の乞食の子のやうに、上の空で何卒お助けをと手をつくのではなし首を下げるのではなし、いきなり人の店先に立つて、

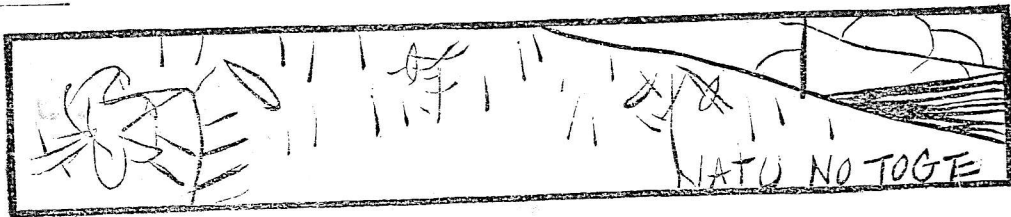
「飯くんちやアやい」と至極横柄なもの。

「出ないよ、今日はなんにもないよ」と言つても、

「飯くんちやアやい」を幾度でも繰り返す。それが執念く立つて居る。光りの弱いそれで何處やら鋭い眼そしてまあ其顔色の青さ！肌理の細からしいだけに其土氣色が不氣味で、一目見て營養不充分といふことがわかる。痩せて居る故か源吉が殊にそれが目立つ。外の二人は色こそ劣らず惡い、それでも少しは脹れて居たやうだ。

「そら！」と小錢を投げてやつても、それには一寸目をくれたまゝ、

「腹が空つてゐるんだから飯くんちやアやい」とばかりいふ。慾のないのが少しは可憐らしくもなつて、豆腐糟炒りとか握飯とかを袋の中に入れてやると、禮も言はずにとつと出て行つて了ふ。由と清吾が後から續



く。この二人はたゞ従いて歩くだけで、強請るのは源吉一人に委して置く。

人情といふものは不思議なもので、かうして三人が並んで歩いて、一番小さな清吾の袋がいつも一等重くなつた。それを普新場の板圍ひの下などで、轉がした石に腰をかけて、分け合つて喰べるところはよく見掛けだが、さて夜は何處に如何して過すのかさつぱりわからない。尤もそれを調べて見るやうな好事者も居なかつた。

三人は生地のまゝの乞食である。町端れの木賃宿で親達の相續が出来て、明日は璧の老爺の孫に見せて使はれるといふやうな、乞食の店飾りにも馴れて居ないから、相變らず三人がぞろ／＼と揃つて飯を貰つて歩くだけでも月日といふものは實際馬鹿には出来ないものだ。知らず／＼別段な指圖も爲ずにいろ／＼なことを教へて行く。

まづ夏が来た。毎日物種屋の角の脇に出て居る屋臺店に、玉蜀黍が青い皮を剥がれて、火の上に翳されて、すつとん／＼と飛ぶやうな身の刎ねる音の間々には、汚い婆様の煽ぐ團扇の大きな花がバチ／＼と散つて消える。空腹が其匂ひに足を止められて、或日三人は暫く其前に立つて見て居た。鼻の頭に油汗を浮かした子供が来て、一錢玉を投げ出して其一本を持つて行つた。すると源吉はそろ／＼と袋から種々の集めたのを出して婆様の前に置いた。目の縁のくしゃ／＼とした婆様は一頻り忙しく瞬きをして、焼けたばかりの可なり大きいのを取つて源吉に渡した。立所に三人はそれを三つに折つて奪ひ合ふ様にてんでにそれを持つた。さア味をしてみた。饅饅頭をた飯やお焦げのお握りなどを頂かせられるよりは、どんなに錢の方が有難いか知れない。

「飯くんちやアやい」が「一文／＼れてくんちやアやい」になつた。それでも乞食としては此言葉は未だなつて居ない。「どうぞ一文頂かして……」はこれは乞食のおさまり文句ではないか。彼等は田舎言葉を丸出しにして居るだけ素人であつた。

三人はいつの間にか別々に歩くことを覺えた。由が廻る。其後を源吉が貰つて歩く。また暫くすると清吾が袋を下げて門に立つ。人々は、はあ、先生達考へたなと思つたばかりで其手には乗らなかつた。併し時々は忘れたり煩さかつたしてつひそら！と投げてやつてしまふ。

町と町の角で二人がばつたり會つたりする。

「お前どの位になつた」

「ほうら、一錢玉があるぞ」など、袋を振つて見せて「横町の酒屋に葬式ちやんぽがあるぞ」などと、言つて過さる。

小さな清吾が廻るのには大抵徒勞がなかつた。源吉は自分がひどくあぶれた日、あんまり忌々しくなつて清吾を張り飛ばして泣かしたことがある。